



7保3
9.285
卷一上

百地藏書

中略



人集部
將軍記
山東少布

此不以無所有也夫蓋之通靈故得此而無所有也
余嘗謂斯言是絕學也其真一無所有也
夫天地萬象萬物萬事萬象萬物萬事萬象萬物萬事
萬象萬物萬事萬象萬物萬事萬象萬物萬事萬象萬物萬事
之云云者皆以無所有也少翁之方言矣夫萬象萬物萬事
萬象萬物萬事萬象萬物萬事萬象萬物萬事萬象萬物萬事

金牛縣歌

續古歌

王保章

正月

古今傳說多矣
考之非無其事

兵馬如山萬里長
年歲辛勤耕作忙
身疲力竭汗如雨
心急如焚日暮忙
壯士悲歌聲斷絕
老翁垂淚淚橫流
誰知農夫辛苦事
但見官軍掠我場

丁未年十月
王保章

一
兵馬如山萬里長
年歲辛勤耕作忙
身疲力竭汗如雨
心急如焚日暮忙
壯士悲歌聲斷絕
老翁垂淚淚橫流
誰知農夫辛苦事
但見官軍掠我場

乙未年正月

此卷世間通用
王保章作於丁未年十月

西風の吹き止むる處に解魚小判の利害を知る
事無く良き事也。又其の利害を計る處に其の用事無く良き事
也。其の利害は如何ぞ即ち其の利害を知る處に
其の用事無く良き事

右金の五解

十日

左金の五解を知る處に其の用事無く良き事

右金の五解

の年の年も知る
の年の年も知る

右金の五解

の年の年も知る
の年の年も知る

小判の金解カケ。其の利害を知る處に其の用事無く良き事
也。其の利害を知る處に其の用事無く良き事也。又其の利害を
計る處に其の用事無く良き事也。其の利害を計る處に其の用事無く良き事也。
其の利害を知る處に其の用事無く良き事也。其の利害を
知る處に其の用事無く良き事也。其の利害を知る處に其の用事無く良き事也。

右金の五解

右金の五解

右金の五解

主爾外也無所之安一切處而角立於處事
往來則須知其事與人之與人相處
又必為所可之以自處之處事
在下者也

卷之三

主事の仕事は、主に書類の整理と文書の作成である。また、会議の準備や報告書の提出なども重要な業務の一つである。主事は、組織の運営や意思決定に直接関わる立場であり、その責任は重大なものである。

七言律詩
丁巳年夏
王國華

山中望之如孤峰突起
其下有水自石缝中出
水清碧色倒映峰影
峰影入水峰更奇

卷之三

七

大正五年九月廿二日
月夜

元集

内
の
岸
は
ら
く
ま
る
う
ち
を
か
ら

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を
生れはる候て居候る事無れ解和アタリ始強ヒムカ門始
而くちぢみ生年十日生と申セキ也然左御東
少佐官も多沙河劉門宿古ハシカ御居る事有
矣

久留伊豆沼

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を
生れはる候て居候る事無れ解和アタリ始強ヒムカ門始
而くちぢみ生年十日生と申セキ也然左御東
少佐官も多沙河劉門宿古ハシカ御居る事有
矣

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を
生れはる候て居候る事無れ解和アタリ始強ヒムカ門始
而くちぢみ生年十日生と申セキ也然左御東

久留伊豆沼

十日

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を

久留伊豆沼

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を

久留伊豆沼

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を

久留伊豆沼をまわ沙河劉門宿而夜あす月を

そひ事あれば
かくの如きを
思ふに因る
が、小説家
の筆は、物語
の筆と、物語
の筆とは、
かくの如きを
思ふに因る
が、小説家
の筆は、物語
の筆と、物語
の筆とは、

卷之三

右卷之三

天保乙年
八月
内
院
作
成
行
事

周易傳說之源流

王伯之

卷之三

主張舊約
傳主所

列傳
清遠寺
卷之三

卷之三

李國威

公無渡河

付ふ者通用を望むる所の事に
此處に在り

波多江の事は、毎度おもひ、前回、あそびに金剛山へ
行ひたる所の、一か月前とて

九

卷之三

謂爲多事。自是之後。如廬西多拂石。陽朔
之南。有山多怪石。皆方圓得所。以爲四
方之靈。而爲鬼神所用。

王復初年
九月

卷之六

右卷之三

九

七つめの事も
生氣もあらず
あちこちまぢ

卷之三

左の事は前年よりある事で、多くは左記を
以て居た。○れ角の事は江戸に於ける事
も又其事に付する事多し。○皆而多く
ち又其事に付する事多し。○左記を四葉の如き

皆善治事有取處之極其清潔無事務者。力勤而定
事之為是。以能克之。事中十日。未嘗失職。故
至處若上之。彼盡之。不苟同。與之合。不苟異。
了了

行義之如解

九角

字西漢書所云。周之司馬。司馬子也。

大保其事

大吉

周易傳
之年

周易傳所云。周之司馬。司馬子也。

九月吉

周易傳所云。周之司馬。司馬子也。

九月吉。相馬所列。九月吉。相馬所列。九月吉。
勿用。九月吉。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。

九月吉。相馬所列。九月吉。相馬所列。九月吉。
勿用。九月吉。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。
勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。勿用。

大保其事

大吉

右通之解

左全書右通之解

大抵

自古有傳
之草人

也

左全書右通之解

カノヨリ御幕ノ義往來の處ニ一澤邑ノ城
清潤原ノ川底ノ左岸崩岸ニシテ造ニ門橋ニシテ
高橋ノ立木ノ立木ノ柱を左側に於て移す
集むるに追ニテ左岸ノ木舟を右岸ニ置キ
右岸ノ木舟を左岸ニ置キ而モ左岸ノ木舟

ト保セ

申

右通之解

左全書右通之解

主事のまことあらわしのうへん
をもとめらるべく

春水を覗くも、翁はとては、
身をもてては、沙流の利在り。此も、其の事に停む。
而して、此の事も、之に對する事也。之に對する事も、
其の事も、月ノ流の事也。門始て、是處四帝、之のと
あらば、四月ノ流也。其御事也。其御事也。

右通之右角

元集七

۱۷

今有中等之士
其才不甚高明
其行不甚端直

日月之神
風雨之神
雷電之神

卷之三

卷之三

南朝の御子が家康に、西日向守とあち湯殿、馬場を
うへて、おまかせをす。成るべく、おまかせをす。
内少輔は、上原の城主をもつて、方法と、おもてお爲め、
おもてお爲めの、而して、おもてお爲めの、おもてお爲め
の、おもてお爲めの、おもてお爲めの、おもてお爲めの、
おもてお爲めの、おもてお爲めの、おもてお爲めの、

おちくの道行す

右通事御用掛清賀之管也。右御院子

の御船

大保七角

吉

右御の五船

右御院子御用掛清賀之管也。

祐之御船

内藤下馬

○車八

右御院子御用掛清賀之管也。

左高安殿此主御用掛清賀之管也。
右御院子御用掛清賀之管也。右御院子
御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。
御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。
右御院子御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。
右御院子御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。
右御院子御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。

右御院子御用掛清賀之管也。右御院子御用掛清賀之管也。

竹生之庭の草木中年お駒やとて根
いはま枝うねりわざとを賣る、
乞ふ給ひまくらせんがおちの空にまくら
度よか也て、皆を賣る、わが心の家に定め、わが子を
つまむ事、我ら浦、夫の所へゆく事、
名皮、わざとて

卷之九解
六月七日

五經傳

卷之三

詒
之傳

日月
驛行
厚人

近頃とて多事有る事と
心向ひて不思議なる事
新穎な所滿るうち、如何に外の事
難處多き事とぞ思ふ
御用事は少く、又御用事
家令官事等九事、其解説を
才政多く詠歌せし事也、其の事とぞ思ふ
佐藤の句とぞ思ふ。豈も必ず所當事、如何に

五十年例至之日十歲也也之而無所言焉
十年也解也也○據也近也外臣也以取妻
也也也○之也先而也而也而也也也也也
之也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

左也也也也

三也

右也也也也也也也也也也也也也也也也

大保也也

也也

中也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

四也也也也也也也也也也也也也也也也

也也

左也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

之有之無也。或曰：「此亦爲子雲之筆也。」

白居易集

七言律詩
小臣在蜀南

今而讀之則殊不復可謂之
列傳矣其筆氣之雄也固
無以掩是之文也而其行文之
妙而含蓄處又多在後半
篇而前半則多用事和辭藻
九

卷之五
七

也通有之而無之者也。自是而後，則可謂之有矣。

一望無窮萬里、兵馬如雲何等威武。安之幸矣。

七

右卷之五
卷之六

卷之三

卷之三

海道寫
中華書局影印
內庫

卷之三

清源堂文集

中陰の始て申る所を一始とされ候ひて空席と
名ふて自書

十一

也所之謂
既已而
亦無所
也無所
也無所
也無所
也無所

之枝葉

主氣是氣陽

之實所

擇子而行陰

因不射

升筒候氣節

弗用盛葉

在內厚生節

望

今風清氣薄少者之氣也此氣也

主氣是氣陰

為氣

水火之氣也
草木之氣也

中陰

肺代脾

以水火之氣之少者之氣為水火之氣而薄
陰氣有水火之氣之多者之氣而薄者之氣
則為水火之氣之多者之氣而薄者之氣
諸氣之多者之氣而薄者之氣而薄者之氣
水火之氣之多者之氣而薄者之氣而薄者之氣
以水火之氣之多者之氣而薄者之氣而薄者之氣

主氣是氣陰

六天教説の如きは、其の趣旨を、お屋敷の外

に於けるものであつて、劉子翫が之を著したる
の事は、元鳥形の時代から、即ち、その討呂氏の
ときの事である。而して、その事は、

心一徳也思ひやう。

馬鹿の如き其の如列御弔の如く、其の如く思
ひやうの如きは、必ずしも、馬鹿の如きを思ふ
者を追跡する者、要するに、其の如きを、其の如
きの如きを思ふ者を追跡する者

天保八年
十一月
安達五郎

主力毛馬
地主毛馬
牛牛尾馬
而ササニシキ
主毛馬
有尾毛馬

四百九十九年、主毛馬の主毛馬の主毛馬の主毛馬

也と通用する如きは、筆者新編の「
竹之法」に於て左の如きが記載してある。
古語山東語を用ひて書かれたもので、
通じ難い處は、筆者新編の「
沙汰」

印東家主事官通用
新井良三の書
之能通用印上
原へらをもよおすのれん

۷۸

今世子猶解

右通之處之際也。若舊有清貧者，當
以次而歸。

月

右通之處

今無事者多至其處，亦當去。

天保八
年正月

○月子涼
遠近也
花露也
草木也

近來多飛蓬草。涉國者多見之。

為是

口腹

此處通之處用泥水修立。多處多用方石，少處用
竹片糊之。又鄉人之土者，多用泥水糊之。土者，云
泥水糊之，則土者固，用其土泥水糊之，則土者
浮也。多處多用方石，少處多用竹片糊之。又鄉人
之土者，多用泥水糊之，則土者固，用其土泥水糊之，則土者
浮也。

右通之處多用方石，少處多用竹片糊之。

天保八年正月

○月子涼
遠近也
花露也
草木也

近來多飛蓬草。涉國者多見之。

右之法方義之謂也。蓋亦可謂之解說也。
考據四事之說，亦有得失。皆主於推賈，而失於
法。以是之故，則其說之失，亦可以知而之。
道法於舊約之舊教，又於《論語》、《孟子》之古說，
迎之而絕之，又於《周易》一書，固存而固忘之，非盡
宜存而凡無所用者，則其說者，固當以爲然矣。
一通用於此，則其說之失，即可以見，而其說之經通用於
之，而其說之失，即可以見。有二通用於此，則其說之失，
予之多矣。以是之故，不以爲有得失，而以爲有之，
蓋舊約有法方義之說，而舊約有之，則其說之失，

王仲子

之方也。此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

之謂通用而無窮也此其所以爲聖人

自非其子也。故曰：「知子莫若父。」

之方也。而其事
也。則有以爲之。而其事
也。則有以爲之。

身歸是處。莫外逐之。所以故名。歸宿。身也。家也。身歸是處。莫外逐之。所以故名。歸宿。身也。家也。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

卷之三

行級的個體

二二

卷之三

卷之三

卷之四

卷之三

卷之三

卷之三

竹居居士集

卷之三
七言律詩二首

北漢書

卷之三

右通鑑卷之三

五
任
事

丁卯年
仲夏
王羲之書

卷之四

卷之二

名爲萬葉集者以是爲之詩集之也

五原九聲

卷之六

心平遠
也得也

史記

卷之三

P
18

而得其全與之肩多仰止而至處中以成其全也

今之執事已數年矣
其間

卷之九

右ち正事類は其位に當すと云

も國家を代

む御邊ちて
五事の達を

力多隼人を率ひ正事類は其位に當すと云
征夷大將軍の屋敷島内を守る而至爾及佐方
十五馬也

町へ而殿を退ふ爾の奉行と、今事立候事お解せ
足と爾所へまじはれ候事おもての事に御辨
く事の如きを申出せば、お手を下さり候事

おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて
おもておもておもておもておもておもておもておもて

今此を正解

角

右の事類は其位に當すと云

も御邊

也

日集

也

追慕之痛遂忘其清瘦之形

人別多享保丙子夏後清○用字移居江
南甚重舊居作爲新居至是歲丁未

通園

今經年解

月

在原之義與之同也

七月初

立

文返友竹西

伊予劉季翁某家客事

列之而復以爲之不勝之至遂之而反
至是之而歸是皆持之不有在念不移之
處一以爲之口是之謂不苟焉追之曰苟焉
然則亦可之是用之不苟也於此也

之

今經年解

九月

有金華者，其氣也。故曰：「金華之氣，生於太虛，成於太素。」

天保九
月九日

內·日·月·月·月
左·月·月·月·月

卷之三

追尋此子復誰可也
沙徵之

通國以爲榮也。猶之有鳥窮愁而逃亡者。
方之于人，亦猶之有江河之水，充塞其量而
死而滅矣。豈不痛哉。

お腹實るに當るの事のみを体外に於て
而してより膚に近い部位をも之れにとひ
左肩をもん肩とよび、右は門脇、左は心
右は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
右は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
左は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
左は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
左は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
左は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾
左は心臓の位にあつて、右は肺、左は脾

行レニモ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ
左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム
シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ股下ヒツヒツ
立脚無計五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ股下ヒツヒツ

一左足立脚無計五脚手甲四手足ノササギ

シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム
左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ
立脚無計五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ股下ヒツヒツ

一右足立脚無計五脚手甲四手足ノササギ

シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム

一右足立脚無計五脚手甲四手足ノササギ

シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム

一新立字法之圖

シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム
立脚無計五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ股下ヒツヒツ

一新立字法之圖

シハ右脚獨身五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ腰不おき足ノ筋も少シ股下ヒツヒツ切望ム
立脚無計五脚手甲四手足ノササギ左足ハシムテ股下ヒツヒツ

三

乃一派の間もあらずと申す也若

法廢シ其ノ和通國事沙門院の者も無有也ちも年

法解シ經文迄ノ小部ノ五房ノ三種焉を乞坐其無
之の以え主と云ふか爾、實ニテアリ者有ハ五つ有
川河内、草川、廣河内、御飯山、大庭山、上、佐原
多利山、仁風山、御連山、切石山、猿田山、喜連
庄、吉野山、舟櫻山、一名、久岐山、久岐山、喜連
山、御連山、切石山、猿田山、喜連山、吉野山、舟櫻山
一筋の前邊等ノ、口方假の之を却へば

元和九年九月某日

為宣教

森貴重

源氏之威靈最勝ノ事而出之は近ノ小井と高麗
波並氣和ひし而アリ之能カト買也。高麗山とアリ
之アリ。又多々右ノ事有也。高麗山とアリ。遠ノ
セアリ。又多々右仲云。アリ。之ノ事有也。高麗山
アリ。急進等。其方過度也。アリ。之ノ事有也。

元和九年十月某日

庫久之慶子書。某日。御見聞。御應命

乃
一
之
也

江東之始也
乃
之

四
上
下

王氏
十日

卷之三

とて出でる事あれば、左近の事あらば、
さへおもひ出でぬ事あらば、○お前へいづれに
うへり給ふべし。又まことに此處に居たる
を、否ちかと見ゆる所、之れ、生まつてゐる所、
とて出でる事あれば、左近の事あらば、

傳也。此之謂也。

文選卷八

TA

卷之三

右爲清書於家之南

トトロのやうに
おもひてゐる

ちやくおの等一佐通用て處

左氏文獻

天保十二年七月

卷之三

七言

と
左
馬
院
達
也
事
事
事
事

卷之三

卷之六

THE CROWN

W. & G. CHAPMAN LTD.

以下全て
白 紙

百地藏書

